

SNS 上のネガティブコメントに過敏な人の性格特性

田辺舞¹ 宍戸葵² 室尾憲史朗³ 藤堂玄太⁴ 武部怜央⁵ 長島優太⁶

要約

近年、SNS による誹謗中傷が原因で、活動休止や自ら命を絶つケースが増加している。たとえ批判コメント数が賞賛コメント数より少なくても、前者に注意を向けてしまう心理的作用を、没入尺度と多次元完全主義認知尺度の2つの観点から明らかにすることを試みた。大学生を対象に、オンライン上で実施したアンケート調査に基づいて、回答者の性格又は自己肯定感といった生得的要素、自己・外的投入度、自身の SNS 上での意思決定を各点数化し、分析を行った。その結果、多次元完全主義認知尺度は批判コメントに対する人間の注目度の差に影響を及ぼさないが、没入尺度の高い人間は、批判コメントに対して敏感であり、過剰に意識する傾向にあると判明した。同時に、ネガティビティバイアスは SNS の構造のみならず、個人の性格特性にも影響することが分かった。この結果を受け、SNS 利用者のポジティブな情報の選択や、SNS との距離の調整が必要になると考える。

JEL 分類番号： D91;I12

キーワード： SNS, 誹謗中傷, ネガティビティバイアス, 没入尺度, 多次元完全主義認知尺度

* 本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

1 同志社大学経済学部経済学科和田美憲ゼミ cgej0820@mail3.doshisha.ac.jp

2 同志社大学経済学部経済学科和田美憲ゼミ cgej0735@mail3.doshisha.ac.jp

3 同志社大学経済学部経済学科和田美憲ゼミ cgej0484@mail3.doshisha.ac.jp

4 同志社大学経済学部経済学科和田美憲ゼミ cgej0862@mail3.doshisha.ac.jp

5 同志社大学経済学部経済学科和田美憲ゼミ cgej0800@mail3.doshisha.ac.jp

6 同志社大学経済学部経済学科和田美憲ゼミ cgej0497@mail3.doshisha.ac.jp

1. イントロダクション

1.1. 研究背景

本論文は、SNS 利用において、ネガティビティバイアスがどのような状況下で発揮されるかについて分析することを目的とするものである。

SNS の普及が進む現代では、その利便性と引き換えに、特定の人物に対する「誹謗中傷」が問題視されている。インフルエンサーのみならず、一般の人々でも些細な事案をきっかけに SNS の使用で悩むこともある。また、近年インターネット依存に関連問題に対する危機意識が世界的に高まっている。我々は、行動経済学に確証バイアス¹という理論があるものの、実際には状況や性格によって自分にとって不都合な情報を集めてしまうのではないかと考えた。そこで私たちが注目したのは、本来注目度の低い少数の意見に反応してしまうケースである。SNS 上での誹謗中傷被害に遭い、精神を病む事例や裁判沙汰になる事例などが増えている。総務省が行った調査²では、ある SNS サービスでの誹謗中傷等に関する投稿について、38.0%が目撃経験があると回答した。目撃頻度は 11.4%が毎日ないしほぼ毎日目撃しており、半分弱が数日に一回程度目撃している。加えて、最高裁にて誹謗中傷を行ったユーザーに対して 315 万円の示談金支払いが命じられた事例も存在する³。そこで我々は、誰でも発言者となれる現代においてどのような人が誹謗中傷に悩みやすいのかについて興味を持った。

以上より、本論文では、どのような性格や特性を持つ人が少数かつネガティブな意見に注目してしまうのかについて論じる。今回の我々の検証の結果、没入尺度が高い人ほど少数かつネガティブな意見に注目しやすいことが分かった。

1.2. 仮説

SNS 利用において、没入度が高く、かつ完全主義的な性格特性を持つ人ほどネガティブかつ少数な意見に注目してしまう。

2. 調査設計

2.1. 考えられる性格特性

「没入尺度が高い」という性格特性を持つ人はネガティビティバイアスを引き起こしやすく（坂本（1997））、「多次元完全主義認知尺度が高い」という性格特性を持つ人は自分の思

¹ 確証バイアスとは、自分の考えや思い込みに固着し、肯定的な情報を集めてしまうこと。

² 「インターネット上の誹謗中傷情報の流通実態に関するアンケート調査」2022 年

³ 実際に幼少期から SNS で活動をされている春名風花氏（通称：はるかぜちゃん）は、とあるツイートをきっかけとして多くの賛同を得るとともに、一部のユーザーからの過激な誹謗中傷に悩まされていた。耐えかねた春名氏は、最終的に法的処置を取った。

い込みや考え方に固着せず少数な意見に着目してしまう（小堀・丹野（2004））と分かっている。

まず没入尺度とは、自己へ注意を向けやすく自己へ向いた注意を維持させやすい傾向の概念化であり、この自己注目の維持という傾向が、落ち込み（抑うつ）に関連している。（坂本（1997））さらに没入尺度を自己没入尺度と外的没入尺度に分けることができる。自己没入傾向がある人は自己が注意の対象となると、自分がどのような行動をとるべきかという行動の指針を意識しやすくなり、現実の自己がその行動の指針にそぐわないと、ネガティブな感情が引き起こされる。外的没入の傾向がある人は、ある一つの外的な対象に向いた注意が維持しやすく、どちらの傾向も抑うつを引き起こす要因であると考えられている。（坂本（1997））

次に、多次元完全主義認知尺度とは、完璧にこなそうとするあまりに自分の能力を超えた高い目標にとらわれたり、ミスを回避しようとしたりすることでネガティブ志向に走ってしまう傾向である。完全主義には適応的な側面と不適応的な側面があるといえる。この尺度では、自分自身に完全性を求める志向である自己志向の完全主義の適応的な側面としての高い目標設定、不適応的な側面としてのミスへのとらわれ、完全性の追求を合わせた3側面の認知傾向を設定。（小堀・丹野（2004））

そこで私たちは、没入尺度が高い人ほど自己が注意の対象となったときに自己の行動に対する評価をネガティブに感じやすく、また多次元完全主義認知尺度は高い人ほど、高い目標の達成やミス回避のためにあらゆる物事から多角的にとらえようとするため、少数な意見にも着目するのではないかと考え、仮説を立てた。

したがって、没入尺度かつ多次元完全主義認知尺度が高い人と SNS 経験との関連を調べるアンケート調査を行った。

2.2. 調査項目

まず大学生 99 人を対象に 2025 年 8 月 13 日から 8 月 25 日の期間で Google forms を用いてアンケート調査を実施した。設問 1～3 ではアンケート回答者の性別、年齢と SNS 利用頻度を尋ねた。設問 4～15 では自己没入を、設問 16～24 では外的没入を低い方から順に 1～5 に設定し、設問 25～40 では多次元完全主義認知尺度を、設問 41～55 では具体的な例から SNS 利用におけるその人の考え方について、低い方から順に 1～4 に設定し尋ねた。これらアンケート調査で得られた回答を集計し、SPSS Ver. 30 を用いて分析した。

3. 分析

没入尺度については、前述した坂本（1997）のアンケートを参照した。自己没入の平均値 34. 1 と、外的没入の平均値 27. 5 をそれぞれ基準とし、この平均値より低い群を「没入尺度が低い群」、高い群を「没入尺度が高い群」と分類した。それぞれ、グループ 1 を「自己没入・外的没入ともに低い群」、グループ 2 を、「自己没入は低い、外的没入が高い群」、グループ 3 を「自己没入は高い、外的没入が低い群」、グループ 4 を「自己没入・外的没入ともに高い群」としている。多次元完全主義認知尺度については、参考文献にアンケートの平均値の記載が無かったため、本アンケートの全回答者の平均値 2. 55 を基準に群分けを行い、平均値以下を「非完全主義群」、平均点以上を「完全主義群」と分類した。それぞれ、グループ 1 を「非完全主義群」、グループ 2 を、「完全主義群」としている。

SNS 利用におけるアンケートについては、平均値が高い方が、より SNS を利用する上で、ネガティブな事象かつ少数な意見に着目しやすいことを表している。（最大値は 56、最小値は 14、平均値は 31. 505）

まず、没入尺度と多次元完全主義認知尺度がそれぞれ SNS 利用のアンケートの平均値とどのような相関があるのかを分析した。没入尺度と SNS 利用の相関係数が、0. 513、多次元完全主義認知尺度と SNS 利用の相関係数が、0. 358 であった。このことから、どちらの尺度も SNS 利用と正の相関があることが分かった。

次に、SPSS を用いて、正規性（K-S 検定）の検定を行った。その結果従属変数としての SNS 利用の点数の分布は正規性を仮定できた。

さらに、各尺度の信頼性を確認するため、Cronbach の α を算出した。その結果、没入尺度は $\alpha = .903$ 、多次元完全主義認知尺度は $\alpha = .889$ であった。以上より、尺度の内的一貫性があることが分かった。

次に、実験参加者間 2 要因分散分析を行った。従属変数はアンケートの得点を集計したものである。要因は没入尺度と多次元完全主義認知尺度で、没入尺度がグループ 1～4 で 4 水準、完全主義認知尺度がグループ 1～2 で 2 水準である。

被験者間効果の検定					
従属変数: SNS					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	14.953 ^a	7	2.136	5.936	<.001
切片	298.224	1	298.224	828.633	<.001
没入尺度	6.162	3	2.054	5.707	.001
完全尺度	.940	1	.940	2.611	.110
没入尺度 * 完全尺度	.636	3	.212	.589	.624
誤差	32.751	91	.360		
総和	550.240	99			

表 1 2 要因分散分析の結果

表 1 は、実験参加者間 2 要因分散分析の結果である。没入尺度と多次元完全主義認知尺度の交互作用の有意確率は、0. 624 であり、有意ではない。また、没入尺度の有意確率は、0. 001、多次元完全主義認知尺度の有意確率は、0. 110 であるため、

没入尺度には有意な差が見られるが、多次元完全主義認知尺度には有意な差が見られない。

上記の結果、没入尺度に有意差があったので、さらに詳しく検証するために没入尺度を要

因とした実験参加者間 1 要因分散分析を行った。各水準の平均点がそれぞれグループ 1 は 28.10, グループ 2 は 24.52, グループ 3 は 35.20, グループ 4 は 37.09 であった。

分散分析

SNS 少数ネガティブ総点数					
	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	2623.684	3	874.561	12.605	<.001
グループ内	6591.063	95	69.380		
合計	9214.747	98			

表 2 1 要因分散分析の結果

表 2 より, F 値が 12.605 で, 有意確率が 0.01 未満なのでグループ間で有意な差がみられた。

Bonferroni による多重比較の結果, グループ 1 と 4, グループ 2 と 3, グループ 2 と 4 に 5% 水準でそれぞれ有意な差がみられ, グループ 1 と 2, グループ 3 と 4 には有意差がないことが明らかになった。

以上の分析結果により, 外的没入の傾向の高低差に関係なく, 自己没入の傾向が高いか低いかによって, SNS 上でネガティブかつ少数な意見に注目しやすいかに影響を与えることが分かった。すなわち, 自己没入の傾向が高い人ほど SNS 利用においてネガティブかつ少数な意見に注目することが示された。

4. 結論

本研究では, SNS でネガティブかつ少数な意見に注目してしまう要因について検討した。その結果, 「SNS 利用において, 没入度が高く, かつ完全主義的な性格特性を持つ人ほどネガティブかつ少数な意見に注目してしまう」という仮説に対し, 自己没入を性格特性として持つ人はネガティブかつ少数な意見を気にしやすいことは立証された。一方で, 外的没入と完全主義的な性格特性があるかどうかはネガティブかつ少数意見を気にすることに影響するとは言えないと分かった。

次に考察を述べる。外的没入の傾向の有無にかかわらず, 自己没入の傾向が高い人ほどネガティブな意見に注目する理由としては, 自己没入度が高い人は自分の評価やミスに敏感であり, ネガティブな意見が「自己への脅威」として知覚され, 批判コメントに過剰に意識してしまうのだろう。完全主義という性格特性が SNS 利用に影響しなかった理由としては, SNS 上のネガティブな意見は, 少数意見であるか否かよりも, 攻撃的で強い表現であるかによってコメントが目立つかが決まるからだろう。完全主義は「理想基準の高さ」や「失敗回避」への傾向であり, 意見の“多数・少数”そのものへの注目とは直結しない可能性が高いと考えられる。したがって, 「どの意見に注目するか」という最初の注意段階では批判コメントが少数意見であるかどうかよりも, ネガティブな強い表現であるかどうかの方が大事で

あり、「SNS におけるネガティブ意見」に注目したあとの行動には、個人の完全主義的傾向よりも没入傾向に大きく依存する。

このことからネガティビティバイアスは SNS の構造だけではなく、個人の性格特性にも影響されるといえる。実際の SNS 利用において、没入傾向がある人はポジティブな情報を意図的に選ぶことや、SNS との距離を調整することが有効であると考えられる。具体的に、すぐできることとしてスマートフォンのミュート機能・時間制限を設けるシステムを使うなどが挙げられる。

本研究では、主に SNS 利用において自己没入度が高い人ほどネガティブかつ少数な意見に目を向けてしまうことが明らかになったが、完全主義傾向の度合いが SNS 利用に影響しなかった背景には「どの意見に注目するか」という段階ではなく、「注意後どのように解釈し、行動に移すか」というプロセスに強く関与している可能性が高いと考えられる。この点を考慮し、誹謗中傷で苦しむ今を生きる者達を救うために、さらに研究を深めていくことが今後の課題である。

引用文献

阿部誠，2013.『行動経済学』. 新星出版社，東京.

文春オンライン，2020. ナイフで滅多刺しにして...” 示談金 315 万” 春名風花が語る「誹謗中傷との 10 年間」. <https://bunshun.jp/articles/-/40416>

ITmediaNews，2011. 3 歳でブログ，9 歳で Twitter 「都条例ぶんすか(ω)」のはるかぜちゃんに聞く (2011 年 1 月) .

https://www.itmedia.co.jp/news/articles/1101/21/news010_2.html

小堀修，丹野義彦，2004. 自己に関する完全主義の認知を多次元で測定する尺度 パーソナリティ研究. 13, 34-43.

坂本真士，1993. 没入尺度作成の試み 日本社会心理学会第 34 回発表論文集. 294-297.

坂本真士，1997. 自己注目と抑うつ of の社会心理学 東京大学出版会.

総務省，2022. インターネット上の誹謗中傷情報の流通実態に関するアンケート (令和 4 年 5 月 12 日). https://www.soumu.go.jp/main_content/000813680.pdf

山本眞理子，2022.『心理測定尺度集 I』. 株式会社サイエンス社，東京.

吉田富二雄，吉本聡介，2016,『心理測定尺度集 V』. 株式会社サイエンス社，東京.